

単独行がもたらす究極の孤絶

角幡唯介

(作家・探検家)

単身で臨んだ2018年2月の北極探検。自分の写る写真が少ないのが、単独行だ。犬は相棒のウヤミリック。



野兵市も、北極海や南極大陸の徒歩横断に成功した大場満郎も単独だった。日本人の著名冒険家のほとんどは単独行者といっても過言ではなく、日本人には単独行でなければ冒険ではないという思考回路さえあるように思われる。

一体これはどうしたことだろう。

様々な観点から見ても、単独行は隊を組んだ場合に比べて不利である。

まず成功へのハードルが高くなる。確かに隊員間で力や意欲に大きな差があると、仲間の存在がお荷物になる場合があるが、それは特殊なケースであり、基本的には単独行よりは仲間と隊を組んだほうが効率は良い。それに単独行は危険度が段違いに高い。個人的な実感からいえば、単独行のほうが仲間がいる場合より最低でも一〇倍は危険だ。それなのに日本人冒険家は

非効率的で危険な、この単独行という行動形態をあえて選ぶのである。

かくいう私も単独で活動することが多い。『空白の五マイル』という作品で描いたチベットのアンポー峡谷空白部の二度の探検も単独行だったし、近年の北極における活動もほとんど単独だ。特に二〇一六―一七年冬は極夜探検(八〇日)、二〇一八年三―五月は白夜放浪(七五日)と、ここ二年は三カ月近くにもおよぶ超長期単独行を実践している。

そのせいか、最近私は、なぜ日本人に単独行者が多いのかという件の謎への答えがなんとなく見えてきた気がする。そもそも自分がその張本人なのだから、自分が単独行をする理由を考えれば、それがそっくりそのまま日本人が単独行をする理由になるはずだ。

冒険家と聞いて思い描くのは、隊を成して挑む者たちの姿か、あるいは単身で目的地を目指す者の姿か。チベットの峡谷・人類未踏部踏破や、北極探検などを単独で行ってきた冒険家が、過去に行った複数人での探検経験も踏まえながら、単独行の本質に迫る。

以前から気になっていた謎がある。

それは、なぜ日本人冒険家にはやたらと単独行者が多いのか、という謎だ。

もちろん欧米の冒険家にも単独行者はいるが、多いのは二、三人で編成する隊であり、単独行者はあくまで少数派だ。それに対して日本人は単独行者が多く、右を見ても左を見ても単独行者ばかりという印象がある。

冒険史を振り返ってみても、一つの傍証になるだろう。登山界でいえば新田次郎の小説のモデルで有名な加藤文太郎、ヨーロッパアルプス三大北壁を冬季に登った長谷川恒男、パタゴニアやヒマラヤでの困難な登攀で著名な山野井泰史はいずれも単独行で名を成した登山家だ。植村直己もアマゾン川筏下りから北極点到達に至るまで活動の多くが単独だし、極地関係でいえば日本人で初めて北極点徒歩到達を達成した河

ニューギニア遠征隊の失敗

私が積極的に単独行を始めたのは大学五年生のときだが、今でもはつきりその理由をおぼえている。

それは一緒に行く友達がいなかったからである。

当時私は大学探検部に所属しており、わりと冬山や沢登りに力を入れていた。ところが自分と同じレベルのモチベーションで山に登っている部員は他に見あたらない。意欲の低いやつと一緒に山に行くと途中で下山したいと言い出しかねず、登山が失敗することが多い。それで私は、部員と一緒に登るより一人で行ったほうがやりたい山登りができると考えたわけだ。

まあ最初はそんなもんだが、この考え方はその後の探検や登山でさらに先鋭化していった。今振り返ってみても大きかったのが、大学卒業時に参加したニューギニア遠征隊での経験である。

この遠征隊はFさんというベテランクライマーが隊長で、私とTさんという女性歌手が隊員というか従僕みたいな存在として参加したへんてこりんな探検隊だった。あくまでFさんという魅力とカリスマに満ち溢れた圧倒的な個性